

地雷の無い世界を

人々の命 紛争後も長く脅かす

国連地雷対策サービス部のコーンさん

ウクライナで続く戦争のニュースで「クラスター爆弾」といった言葉を聞いた人もいるでしょう。地雷と並び、紛争が終わってから何十年も人々を傷つける兵器です。米ニューヨークに本部がある国連地雷対策サービス部（UNMAS）のアイリーン・コーン部長（63）が先月、来日した際に朝中高の取材に応じました。地雷の危険性や日本の10代に伝えたいことを聞きました。（中塚慧）

紛争地の子どもたちの未来を守る

——UNMASはどんな活動をしていますか。

地雷は地中に埋める爆薬で、その上を踏んだら爆発します。私たちは、紛争によって仕掛けられた地雷やその他の爆発物を取り除き、その危険から人々を守る活動をしています。主なエリアは、アフリカや中東の国々です。

また、地雷が残る地域の学校などに出向き、特に子どもたちに爆発物の危険性や取り扱い方を伝える活動もしています。「リスク・エデュケーション」といって、将来の被害

を防ぐことに役立ちます。さらに、軍縮や人道のための国際条約のアドボケイト（擁護者）として、こうした条約の大切さを訴えることも私たちの役割です。日本も参加する対人地雷全面禁止条約などを世界に広めています。

——日本の中高生に地雷はあまりなじみがありません。どう危険なんでしょうか。



9月15日、東京都渋谷区
UNMASの活動について語るアイリーン・コーンさん

国連地雷対策サービス部（UNMAS）

国連の部局として1997年に設立された。地雷対策に関わる国連の他の組織をまとめる役割を担う。2022年は21の国と地域で、戦争によって残された約11万個の爆発物や約6千個の地雷などを処理。爆発物の危険性や取り扱いについて伝える教育活動を260万人以上にした。世界各地で3173人が働いている。

クラスター爆弾禁止条約。クラスター爆弾の生産や貯蔵、使用、移譲を禁止する条約。2008年に採択され、10年に発効した。ノルウェーの首都オスロで調印されたことから、オスロ条約とも呼ばれる。今年3月時点で、日本を含む111カ国・地域が加盟している。米国は参加していないがクラスター爆弾の危険性は認め、長く使用を控えてきた。



ば橋に地雷を仕掛けられたら、仕事に行けず生計を立てられなくなる人もいます。私たちは学校や病院、畑、道路から地雷を取り除き、人々が安心して元の生活に戻れるよう力を尽くしています。地雷処理にはたくさんのお金がかかります。多くが人の手を実際に使う力仕事です。また気候変動の影響もあり、洪水が地雷の位置をずらすことがあります。地雷があつたと思われるところになく、思わぬところにあることも。本当に大変な作業です。

クラスター爆弾の使用危険

——ロシアの侵攻により争いが続くウクライナに、米国は7月、クラスター爆弾を供与しました。

クラスター爆弾は容器状の親爆弾の中に、野球ボールくらいの大きさの子爆弾がたくさん入っています。子爆弾は空中でばらまかれます。子爆弾のうち4割近くが爆発せずに残るとされ、「第2の地雷」といわれます。

これは、でたらめに地雷をしかけるようなもの。どこに落とされたかの地図がないまま

父の迫害の体験 人生に深く影響

——コーンさんは米国で生まれ育ちました。10代のころのことを教えてください。

父はドイツ出身のユダヤ人。第2次世界大戦（1939〜45年）中、ユダヤ人はナチスドイツに迫害を受け、多くの人が虐殺されました。父は6歳の時、家族で命からがら米国に亡命しました。私の親戚には強制収容所で殺された人もいます。



スーダンと南スーダンの国境近くで、防護服を身につけて活動する地雷除去員たち UNMAS提供

——どうして国連に入ったのですか。

法科大学院に進み、人権や人道に関する国際法を専門に学びました。国際情勢についても研究し、国際法と国際情勢の両方に関わる仕事をしたいと考えたのです。私が通った大学院は米国ニューヨークにあつたので、同じ街に本部がある国連をめざそうと、インターンシップ（就業体験）から始めました。

90年代には、内戦が続く中米のエルサルバドルやグアテマラで子どもたちを支える仕事をしました。

人道的な目標に向けて、日本の若い世代ができることはこれからたくさんあるでしょう。みなさんに期待していますよ。

日本は世界平和に貢献 若い世代にも期待



アフリカの南スーダンで子どもたちに「リスク・エデュケーション」を行う様子 UNMAS提供

日本の10代へ

興味のあることを追いつけて

Just constantly take the next thing that's interesting to you, and don't worry too much about having a plan. (計画を立てることにあまりとらわれず、興味のあることを次々と追いつけて)

私は子どものころ、将来何がしたいか考えたことはありませんでした。私のまわりで興味深いキャリアを歩んでいる人たちも、初めから計画していたわけではなかった人ばかりです。その時々好きなことを続けていると、おのずと次の機会が訪れるものです。そして振り返った時に、長いキャリアの物語になっているのです。